

2009年度第2学期 共通教育科目「哲学基礎B」

「認識するとはどういうことか？」
第6回講義 (2009年11月12日)

§6 イギリス経験論

1、John Locke

ジョン・ロック (1632-1704) は、イギリスのリントンに生まれた。
オクスフォード大学では哲学および主として医学を修めた。

「ピューリタン革命、王政復古、名誉革命と、激動していく時代に生活し、人民主権に基づく代議制民主政治の理論を基礎づけることによって、名誉革命の指導的理論家となった。」(『哲学事典』平凡社、「ロック」の項)

著作

- (1689) [*A Letter Concerning Toleration*](#) 『寛容論』
 - (1690) *A Second Letter Concerning Toleration*
 - (1692) *A Third Letter for Toleration*
- (1689) [*Two Treatises of Government*](#) 『市民政府二論』(岩波文庫)
- (1690) [*An Essay Concerning Human Understanding*](#) 『人間知性論』(岩波文庫)
- (1693) [*Some Thoughts Concerning Education*](#) 『教育論』(岩波文庫)
- (1695) *The Reasonableness of Christianity, as Delivered in the Scriptures*
 - (1695) *A Vindication of the Reasonableness of Christianity*

[ロックの問題意識 認識論の登場]

「私の居間に、5、6人の友人が集まって、本書とたいへんかけ離れたある主題を論じていたところ、四方八方からおこる難問に友人達はたちまちとほうにくれました。私たちは、自分をなやます疑惑の解決に一步も近づかずに、しばしとまどっていました。そのあげく、私はふと、自分たちの道が間違っていて、この性質の探求を始める前に自分達自身の才能を調べ、私たちの知性が取り扱うのに適した対象と適さない対象とをしらべてみる必要があると、思いつきました。このことを私は仲間の者に提案し、みな即座に同意し、そこで、これこそ私たちのまず探求することだと一致しました。」(『人間知性論』岩波文庫、第一巻、p19)

「私の目指すところは人間の真知の起源と絶対確実性と範囲を探求し、あわせて信念・臆見・同意の根拠と程度を探求することである。」(33)

「もし私たちが、知性はその視線をどこまで及ぼせるか、そのいろいろな機能はどこまで絶対確実性に達するか、どんな場合にはただそうだと判断し、憶測できるだけなのかを見いだせたら、私たちは現世で遂げられるもので甘んじることを学ぶだろう。」(36)

[経験論 すべての観念と認識は経験から生じる。]

1、ロックは、生得的な観念のみならず、生得的な原理も認めない。

「およそあるものはある」とか「同じ事物があつてあらぬことはない」という原理についても生得的な原理とはみとめない。なぜなら、それは子供達や白痴などには知られないからである、という。(43)

ロックは、理知(reason)という能力が生得的であることは認めるが、それは特定の原理を生得的にもつものではないと考える。

「普遍的真理は、事物自身のあり方を適正に考察するとき、このあり方の結果として人々の心の内に生じたのであつて、事物について適正に用いられるときは、事物を受け入れ判定するように自然に仕組まれてある諸機能を使って発見されたのである。」(130)

***論理学については、どのような論理法則も将来改定される可能性があり、経験的な知識である、とする見方があります。(クワイン「経験主義の二つのドグマ」(クワイン著『論理学的観点から』飯田隆訳、岩波書店))**

2、観念の起源について

・観念とは、思考の志向対象である。

「およそ人間はすべて思考するとみずから意識するし、思考する間に心が向けられるのは心にある観念であるから、疑いもなく人々は、白さ・硬さ・甘さ・思考・運動・人間・象・集団・酔いその他の言葉で表現される観念のようないくつかの観念を心にもっている。」(133)

・いっさいの観念は感覚もしくは内省からくる。

「心は、文字をまったく欠いた白紙(タブラ・ラサ)で、観念はすこしもないと想定しよう。」133

「どこから心は理知的推理と知識のすべての材料をわがものにするのか。これにたいして、私は一語で経験からと答える。この経験に私たちのいっさいの知識は根底をもち、この経験からいっさいの知識は究極的に由来する。外的可感的な事物について行われる観察にせよ、私たちがみずから知覚し内省する心の内的作用に付いて行われる観察にせよ、私たちのへ思考の全材料を供給するものである。」134

3、観念の二つの源泉

- (1) 外的対象についての感覚
- (2) 心の作用についての反省

4、単純観念と複合観念

<単純観念:「心がただ受動的に受け取るだけの観念」(2-7)>

- (1) 一つの感覚に由来するもの(色、固さ)
- (2) 複数の感覚に由来するもの(空間、延長、形象、静止、運動など)
- (3) 反省に由来するもの(思考すること、意志すること)

- (4) 感覚と反省のいずれにも伴いうるもの (快、苦痛、存在、統一、力、継続など)
・「心は単純観念を作ることにはできない。」

<複合観念>

複合観念は、

「実体」：「自分自身で存立する別個な個々の事物を表象するとされるような単純観念の集成」(2-10)

「様相」：「実体の性状と考えられる複雑観念」(2-10)

「関係」：「一つの観念を他の観念と考え合わせ、比較するところに存する観念」の三種類に分類される。

例えば、「鈍い白みがかかった色、ある程度の重さ、固さ、柔軟性、可溶性」というごとき、それぞれに単純観念であるものがここに結合されることによって、「錫」という実体の観念が生ずる。

例えば、「すべる、ころがる、あるく、はう、走る、おどる、はねる」などは**運動の様相**である。また、さまざまな**感情は心の作用の様相**である。

例えば、「同一性」「差異性」「原因と結果」などは関係である。

5、第一性質と第二性質

第一性質：人間によって知覚されると否とにかかわらず、物体そのものの中であって、人間の心に像を生ぜしめる実在的性質。

(固体性、不可入性、延長、形象、運動、静止)

第二性質：人間の心の中に(色、音、香りなどのような)感覚を生ぜしめる力である。

「物体の第一性質の観念は、物体の類似物であり、その範型は物体自身に実在するが、それら二次性質によって私たちのうちに生み出される観念は、物体に少しも類似しないのである。」(191)

6、知識(knowledge)と臆見(opinion)

・「およそ心は、そのあらゆる思惟と推理に当たって、心自身の観念の他に直接の対象をなにももたず、観念だけを観想し、また観想できる。したがって、明白に、私たちの知識はただ観念に関わるだけである。

してみると、知識は、私たちの観念のあるものの結合・一致あるいは不一致・背馳の知覚に他ならないように私には思われる。この点にだけ知識は存する。」

- ・知識に属するのは、次の三種である。

直観的知識 (自我の存在、「白は黒でない」「円は三角形でない」など)

論証的知識 (神の存在、数学、道徳法則)

感覺的知識 (上の二つは諸観念同士的一致や不一致についての知識であるが、これは観念と外界の物体との一致や不一致についての知識である。)

・自然学と歴史学は、臆見に属する。それらは確実な知ではなく、蓋然的な知（信念）である。しかしながら、ロックは自然学そのものを否定するものではない。

2 George Berkeley バークリー (1685 - 1753)

「聖職者の生涯をおくって、社会改良や伝導の実践に努力した彼の哲学的思索の意図は、当時興隆しつつあった自然科学の唯物論的、無心論的傾向からの神の栄光を擁護することであった。そのため、ロックに始まる今ひとつの新思想である経験的内観心理主義に頼って、唯物論の基礎としての物質の認識可能性を否定し、实在論を否認した。彼の哲学の近代性と歴史的意義は種としてのこのロックからヒュームへのイギリス経験論の発達に貢献した点にある。」（『哲学事典』平凡社より）

主著

『A Treatise Concerning Principles of Human Knowledge』（1710）

『人知原理論』岩波文庫

[観念論]

まず、バークリーは、ロックの第一性質と第二性質の区別を否定して、ともに主観的なものと考えた。

さらに、バークリーは、物質的実体をも、我々の心の内における観念にすぎないと考えた。例えばつぎのようにいう。「私はここにあるサクランボウを見、それに触れ、それを味わう。存在しないものは、見られもせず、触れられもせず、味わわれることもない。だからサクランボウは現実に存在していると私は信じている。だがしかし、その柔らかさ、みずみずしさ、赤らみ、甘味をおびた酸味を取り去れば、もはやサクランボウは存在しない。したがってサクランボウはこれらの感覚と別個のものではない。だから私は言う。サクランボウは、種々なる感覚から得られた感性的印象、あるいは観念の集合にほかならない。」

かれの有名な言葉で言えば、「存在とは、知覚されてあることである」“*There esse is percipi*”ということである。

ただし、心あるいは精神は、それを知覚しつつあるものとして存在する。

[神について]

バークリーは、我々が自然についての観念をもつのは、神が自然界の観念を我々のうちに成立させているからである、と考えた。

「自然の観念は神のうちに座をもつがゆえに、我々にとっては任意に変更することのできない必然的な法則性をもっているのである。」

3 David Hume

ヒューム(1711 - 1776)はエディンバラに生まれた。

主著

[*A Treatise of Human Nature*](#): 『人性論』 (1739 - 40) 岩波文庫

『人間的知性に関する探求』 (1748)

『道徳の原理に関する探求』 (1751)

『政治論』 (1752)

『英国史』 (1754、56、59)

1、印象と観念

ヒュームは、人間の認識を、印象と観念を基礎として、導出した。

印象(impression) : 我々の意識の中には、強く迫ってくるいきいきした何らかの 内容がある。ただし「それはいかなる原因によるものであるかわからない」

観念(ideas) : 「観念とは印象の色あせた映像(the faint image)である。」
記憶の内容、想像の内容。

2、二種の知識

確実な知識 : 観念の関係に関する知識 : 数学、論理学

(観念の次の4つの関係は絶対的に確実に知ることができる。

観念の類似・反対・質の程度・量ないし数の割合)

蓋然的知識 : 実際の事柄(matters of facts)に関する知識 : 経験的知識、自然学と歴史学 (因果性・実体性に関する知識)

「実際の事柄に関するすべての推理は、原因結果の関係の上に、基づけられるように思われる。その関係によってのみ、我々の記憶と感官の明証を越えでることが可能である」
(『人間知性研究』 4. 22)

3、因果性批判

原因と結果の関係は、それらの印象それ自身の中にはない。それでは、因果性の観念はどこから生じるのか。

我々は何度かAという出来事にBという出来事が続いて起こるということを経験し、AにBが伴う確率が多くなっていけばいだけ、我々はAにおいてかつてのBを想起し、そうしてBに類する物がこの場合にも引き続いて起こるだろうと予期するような習慣(custom)をもつにいたるであろう。AにおいてBを予期するということは、いわゆる推論ではなくして、Aの観念からBの観念におのずからにして移りゆく習慣的な推移の直接的な感情に他ならない。こうしてヒュームは、因果性(causation)の観念は印象そのものの中に客観的に含まれているものではなくして、かえってその源泉を我々自身の主観的な習慣と、それに基づく信念に負うものであるとした。

4、実体性批判

ヒュームは、バークリと同様に、実体とは同時的なる観念の束(bundle or collection of ideas)に他ならないと考えた。そして、同様な理由によって、彼は自我と呼ばれる実体も観念の束にすぎないと考えた。

因果性の観念が単に観念結合の習慣に基づく主観的な信念にすぎなかったように、実体性の観念もそれと同様な習慣に基づく主観的な信念にすぎないと考えた。

